

虚構主義 と 計算機科学の合理性

井上拓己 (Takumi Inoue)

北海道大学大学院 理学院 博士後期課程 2年

本発表では、反実在論的立場から科学の合理性についての考察を進める。

現代急速に発展している科学研究の分野として、計算機シミュレーションによる数値実験が挙げられる。従来の実験や理論からのアプローチとは大きく異なる手法を用いており、時にその科学的な知識としての妥当性について批判的な議論が繰り返されることもある。

そのような計算機シミュレーション実験の意義を議論するうえで1つのカギとなるのが「虚構主義(Fictionalism)」の解釈であろう。A. Fine(1993)は Vaihinger の "As IF" の哲学を再評価し、また Winsberg(2006 など)は実在に頼らない形でシミュレーション科学の合理性を評価する基準を提案している。これらの議論をシミュレーション科学以外への適用も含めて考察し、その哲学的見解の有用性について検討する。

ただし、上記のような議論は Morrison(2008)などが指摘するように、文脈依存性があると言う点も忘れてはならない。Morrison の主張する、Fiction の種類のさらなる区別と合わせて、その議論の対象となっている科学研究の目的を明確にすることも必要であろう。

従来の科学哲学の議論の積み重ねを、地球温暖化問題のような科学が関わる現代の社会においてどのように活用していくことができるのか。そのような、応用的側面にも注目しつつ、現代における反実在論的な議論の展開を考察したい。